

校長研修だより1

カッコいい大人 2021・4・12 重枝 一郎

先週は、年度初めの研修会、職員会議、始業式、入学式、ありがとうございました。

4月5日に「中高新任オリエンテーション」では、新しい先生方に対し、「先生方がこの学校で勤務することは自分の成長につながる、と思ってもらえるような学校に私もしていきたい」と話した。実はこの「校長研修だより」もその一助になればいいと思って書いている。もちろん、全職員においてでもある。そこでお願いがある。先生方にはこのお便りをファイリングして持っておいてほしい。研修会でお願いした“再現性”にも活用してもらいたい。

さて、タイトルの話にうつる。私が社会に出たとき、「カッコいい」と感じた大人や活躍している人は、学歴にかかわらず、「自分のことばかりではなく、まわりの人のことを考えられる人」や「前例がなくても『やったらいける』と考えられる人」だったように思う。その反面、「指示されたことしかやりたくない」「やっても無駄」「自分がよければそれでいい」と考えている大人もいるように思えた。

なぜ「考え方」に大きな差があるのだろうかと考えた結果、それまでの人生の「やったらいけた」という経験や「自分なりの考えをまわりから認められた経験」の量が要因であると思った。

私は、先生方や生徒を「かっこよく」したい。そのためには、上に書いたように、どのような経験の積みせ方をすればいいのかが重要である。

実は、このことは“今”の教育改革に通じている。

“今”の時代背景として、大学入試では「自分の考え方を立案し、表現する力」を重視する流れが急速に進んでいる。一方、「高校生の生活と意識に関する調査報告書」（独立行政法人国立青少年教育振興機関）では、多くの生徒が「自分はダメな人間だ」「人の意見に流されやすい」と自分をネガティブに捉えている傾向にあるというデータが出ている。

新しい時代に求められる「自分の考えを組み立て、表現する力」を育むために、高校では「総合的な探究の時間」がつけられ、その主体的・協働的な研究の成果を入試でも活用されるようになっていく。

次の社会が次の世代に求める力・・・これは、私たち教師、生徒共に日常の学校教育で共有されていないと、私たちも生徒も足を引っ張り合う関係になってしまう。つまり、私たち自身の仕事も生徒の学習活動も「自分の意見を考え、伝える」経験値を上げていくことと、それに対して「まわりから良い反応を得る」という成功体験を繰り返すことが、教師も生徒も自分の可能性を広げ、先の未来を強く生きる力につながると考える。

私は、よく生徒に対し、「自分が選んだ道を正解にする力」という話をする。部活動を決めるときにも、生徒が進路選択するときにも使えるフレーズだと思う。「正解にするためにどう考え、どう行動する？」ということを生徒に問えばいい。

そのためにも、私たち教師自身が新しい視点・気づきを得て成長しながら、「カッコいい大人」になる必要がある。

大切な考え方は、あらゆる能力が身に付いて、条件が整ったから挑戦できるのではなく、挑戦するから能力が身に付き、条件を整えることができるということ。これが、「自分が選んだ道を成果にする力」であり、「カッコいい大人」である。